

Title	曾國潘と俗文學
Sub Title	Tsêng Kuo-fan and popular literature
Author	佐藤, 一郎(Sato, Ichiro)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1957
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.7, (1957. 12) ,p.106- 116
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00070001-0106

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

會國藩と俗文學

佐藤一郎

一序

ここに掲げた會國藩（一八一—一七二）と俗文學という題は、或は奇矯を好むかの如き印象を世人にあたえるかも知れない。會國藩こそは桐城派中興の祖であり、中國の古文の傳統の最後を飾る名手として、その令名があまりに高いからである。もちろん少しく範圍を擴大して政治の分野に眼を轉ずれば、毀譽褒貶相半ばするといわなければならないのかも知れないが、問題整理の都合上、ここでは彼の文學的業績の意義に限定したいとおもう。なお、この廣範圍での相關關係については、「藝文研究」第六號において、すでに少しく觸れておいたつもりである。

今、ここで改めて論じたいのは、桐城派古文の再度の隆盛を保證した會國藩は、いつたほどの程度まで俗文學を許容していたのかという問題である。桐城派の始祖である姚鼐とか方苞などの人々が純粹に古文のみを信じていた態度をおもいおこす時（これを前期の桐義理中心の載道）、俗文學に對する抱擁力を顯著に備えていたことは事實である。それに會氏の影響下に林紓・俞樾のような人々が輩出しているのだし、近代文學前史の運動の性格にも、彼のこのような態度が影響していないとは云いきれない。古文学家と規定する前に、少しく丁寧に具體例に當つてみたらどのような結果が生ずるであろうか。それほど實際には、彼の俗文學は大きな比重は占めていない

ということを、改めて確認することになつても、それはそれで意義がある。いな、翻つてその古文の性格を考える上にも、こうした試みは必ずしも無意味ではなからう。以上のような自問自答の上に出来あがつたのがこの一文である。

二

俗文學とは、いつたい何を指してそう呼ぶのか。甚だ漠然とした言葉ではあるが、當時の文學の擔手だつた士大夫の文學に對して、俗文學なる言葉を對置した。士大夫の文學という詩文中心の傳統的文學に對して、士大夫の文學に入らないものを考えることができよう。まず第一に、士大夫の文學に對して庶民の文學としての、文語體を中心とする文學に對して口語體の文學であるとの定義が可能であらうが、(もちろん士大夫出身で、小)また正統派ではないが現在の文學的規準に照した場合、より濃厚な血縁關係の認められる小説歌謡の類を想定してみても、そう遠くはない。要するに教養ある支配階級の眼からすれば、正面きつて論ずるに値いしない、その實、虚心に讀めば面白くないこともない作品を指す。(鄭振鐸に、「中國俗文學史」と題する名著がある。)

従つて古文の傳統の上に立つ正統派の士大夫階級は、普通、俗文學に反應を示すことを好まない。特に志を得て政府の高官の地位に陞つた人々にはこの傾向が目立つ。そして甚だしい場合には、全然關心がないかである。たとえ讀んでゐるにしたらとて、その事實を公表はしない。それは士大夫たる者の教養の範圍をはみだしており、その階級の倫理觀にはずれてゐると見なされるからである。

曾國藩も基本的には同じ系統を辿つた人であるが、自己の古文の精神を貫きつつそれを俗文學の實作で應用してゐるといふ點では、いささかこの範圍を超えているし、詳細かつ老大な日記に(道光二十六年)咸豐七年の十二年間は缺けてゐるが、道光二十一年正月元咸豐八年六月から易寶の日に至る、(道光二十六年)外への發表を意圖することなく、よくその俗文學に關しての反應をも記録してゐるのは注目に値する。發表を意圖しなかつた日記が、これほど完全に残つてゐる例は、清代の目星しい人物のなかでは、まず稀有の事實である。

そこで曾國藩と俗文學という主題を追求する上に、實作の外に「日記」とこれも十二卷にのぼる「家書家訓」があり、どのような書

物をどういう動機で讀んだか、いちいち具體的に知ることが出来て興味深いものがある。これらの資料を追いながら、徐々に問題を解きほぐして行きたい。曾國藩の俗文學についての見解のほぼすべてを盡したと信する、次に擧げる數々の例を丹念に組合せて行くならば、彼の文學觀のいわば裏側にあたる俗文學の面から、ついには表側の文學における未知なる性格の一端をも明かにすることができてもかもしれない。では、いよいよ本論に入ることにしよう。

三

曾國藩は太平天國戰爭の間に、俗謡形式の歌を七首つくつてゐる。即ち保守平安歌三首は、咸豐二年湖南湘郷の本籍でつくつたものだが、第一莫逃走・第二要齊心・第三操武藝・から成り、いずれも一句七字で三百三十六字の長さがある。水師得勝歌は咸豐五年江西南康水營での作、同じ形で四百六十二字。陸軍得勝歌は咸豐六年江西南昌省城での作、千三十六字。愛民歌は咸豐八年江西建昌大營での作・五百六十字。解散歌は咸豐十一年安徽祁門大營での作、四百七十六字。ここでは最初の、第一莫逃走を例に引こう。

眾人謠言雖滿口
我境僻處萬山中
我走天下一大半
走盡九州并四海
別處紛紛多擾動
若嫌此地不安靜
只怕爾們太膽小

我境切莫亂逃走
四方大路皆不通
惟有此處可避亂
惟有此處最自在
此處卻是桃源洞
別處更難逃性命
一聞謠言便慌了

一人倉忙四山逃
男子縱然逃得脫
壯丁縱然逃得脫
文契縱然帶著走
衣服縱然帶著走
走出門來無屋住
夜無被鋪牀板寬
受盡辛苦破盡財
祇因謠言自驚慌
茶陵道州遭土匪
其餘各縣逃走人
我境大家要保全
任憑謠言風浪起
一家安穩不喫驚
一人當事不害怕
本鄉本土總不離
地方公事齊心辦

一家大小泣嗷嗷
婦女難免受煎熬
老幼難免哭號咷
錢財不能帶分毫
豬牛雞帶一根毛
躲在山中北風號
日無鍋甑切菜刀
其實賊匪并未來
惹起土匪吵一場
皆因驚慌先走徙
多因謠言嚇斷魂
切記不可聽謠言
我們穩坐釣魚船
十家太平不躲兵
百人心中有柄闌
立定主意不不移
大家喫碗安樂飯

(省略なし)

これはおよそ藝術のための藝術とは、正反對の立場に立つ歌謡である。人生的な觀照の深さを誇る文學とも異質である。はじめからもの考え方と技術の上で、一般の文學の世界とは絶縁しているが、實際の役に立つということを眼目にしている點では、古文における信念と通ずるものがある。だから古文と通ずるのは特に信條においてで、歌謡のもつ文學的意義がもしあるとすれば、それについてはさらに後程、改めて考えてみることにしよう。曾國藩の表藝である古文をよくみると文集は三卷、詩集も同様に三卷の極めて少ない量であり、しかもそのほとんどすべてが人の依頼をうけて後につくつた、實用に供するための文であり、彼の著作の最も尠大な量を占める部分は經世致用の觀念におおわれている奏稿及び編纂ものであることに注意されたい。

そこからこの俗謡における教育効果の尊重が導きだされる。讀者または歌い手あるいは聞き手の共感を得ることが第一の目的になる。そして教育宣傳の對象を一般士大夫階級から、庶民に理解される範圍にまで擴大した時、自然にこのような宣傳的な形式におもひあたつたのではなからうか。

國藩の弟子である黎庶昌の編集した「曾文正公年譜」の辛酉・咸豐十一年一月の項に、次の記事がある。「……是の月、公解散歌一首を作る。賊に陥るの境に流布して、難民の賊中に困まよむ者に其の苦衷を曲達す。士民之を讀みて、感泣せざる莫し。此に因りて自ら抜けて來歸する者頗る多し。」

これは解散歌について述べてはいるが、保守平安歌の場合にも事情はほぼ同様であると考えられる。事實彼の意圖したような効果が、ここではあらわれているのだ。

また咸豐七年十二月十四日の沈浦九弟(國荃)にあてた手紙では、「帶勇の法は、人才を體察するを以て、第一と爲す。營規を整頓し、戰守を講求するは之に次ぐ。得勝歌中の各條を得て、一一皆宜く詳求すべし。」

對象は文字に親しまない階層ばかりではない。有識階級である自分の弟にこう書いているのだから、非常にここに歌いこんだ内容は重視していることがわかる。必要な事項はすべて盛りこんで、規範として相手に認めさせようとしている。内容を正しく傳達することすべてに優先しており、形式は傳達すべき對象がひろい階層にわたるところから必要に迫られて選擇されたとしかおもわれない。

では、この新しい對象に臨むに彼はどれだけの用意があつたか。まず俗耳に入りやすき要素として極めて、口調がよろしい。再び例を第一の莫逃走にとれば、口・走。中・通。半・亂。海・在。靜・命。小・了。逃・噉というようにいづれも韻を踏み、水師得勝歌の序に「遂に水師得勝歌を製し、士卒をして歌誦せしめ、口相習いて以て熟し、其の大略に嫻たわしめんと冀こころがう。」とあるがごとく、歌わせることを目的にしたものである。彼が作詩にあつて聲調を尊んだことは、ひろく世に知られており、その家訓のなかでも、繰返し繰返し子弟に聲調の重要性をさとしている。例えば咸豐八年八月二十日には、「凡そ作詩は最も聲調を講究すべし。余選鈔する所の五古九家七古六家は、聲調皆極めて鏗鏘にして、人の百讀に耐えて厭いとれず。」また咸豐十一年二月二十四日には、「余が日記の冊中に又八本の説あり。曰、書を讀むは訓詁を以て本と爲す、詩文を作るは聲調を以て本と爲す。……」(同年三月初四日の手紙にも同様の句あり)してみると、ここにもごく屈折した形で、彼の文學の理想の一端があらわれているわけでその詩論の本質には歌う詩・咏ずる詩への指向を元來有していたのである。

さらにまた形式の上で數え歌の形を水師得勝歌および陸軍得勝歌でとつていることは、やはり俗耳に入りやすい効果をねらつたものであるが、ここで咏じている内容を検討してみると、下情にはかなりの程度通じていたことが分る。猪牛雞帶一根毛とか、地方公事齊心辦などの句は、地方の農民の生活に相當通じていなければ出てくるものではない。ここで國藩の家柄を考えてみる必要がある。父がわずかに晩年秀才の資格を得ただけの中農の出身である。「吾曾氏、家世と微薄、明より以來、家業を以て名を發する者なし」(誥封光祿大夫會府君墓志)という家に成人した國藩は、戰場からでさえ農耕の實際上の注意を家にある澄季の兩弟にしばしば與えている。例えば咸豐八年七月二十一日には、「家中蔬を種るの一事は、千萬怠忽する可らず。屋門首塘の養魚も亦一種の生機有り。猪を養うも亦内政の要なる者、下首臺上の新竹、枯れる者有りや否や」などはそれで、別に經濟的な必要を感じない身分に至つても、一家の氣風を作興する目的で農事を奨励しているのである。同年八月二十二日には、「家中養魚・養猪・種竹・種蔬の四事は皆忽せにす可らず。一は則ち先祖以來相承の家風を接ぎ、二は則ち其の外一種の生氣あるを望む。其の庭に登りて一種の旺氣有り。幾個の錢を多く花つばい、幾個の工を多く請うと雖も、但此の四事の上に在りて用いるは、總て是れ妨げなし。」(咸豐九年四月二十三日にも同趣旨の文) (あり同年閏三月二十九日の記事参照) 限界はある。

が國藩は、とくに太平天國戰爭の時期を通して下情に通ずる機会を多くもつた。永い京官時代には途絶えていたとはいえ、その生活環境は彼等と理解を絶するほど遠く離れていたわけではない。それぞれの歌の下に字數を示しておいたが、量的にもかなり大がかりなものが、咸豐二年から咸豐十一年にわたつて作られている。そして、いずれもこのような形式をとるべき必然性のあつた太平天國戰爭の最中の作である。

では、この俗謡はどのような流れを汲んでいるのだろうか、これについては奥野信太郎先生から童謡（童謡）という俗謡の流れを汲むものであることを御教示いただいた。吉川幸次郎先生の指摘される、太平天國側の同系の歌謡については、またそれとの關聯については、今後さらに調査の機会を得ることを願つている。

四

前章で曾國藩の歌謡は、すべて太平天國戰爭中に作られていることを述べたが、俗文學全體にわたる關心の在り方を見て行くと、やはりこの戰爭中に高まつていることが分る。その日記にあらわれたところでは、小説を讀んだ記事は年少氣銳の頃にはほとんどなく、わずかに道光二十三年二月十八日（三十三歳）に「岱雲來館し久しく談ず、夜家に在りて小説を見る。」とあり、同年同月の二十日に「晏起す、飯後小説を見る。」の二例があるだけで、あとは太平天國戰爭も半ばを過ぎ、彼が四十九の齡を重ねてから、にわかにもその事例を多く見るにいたるのは興味ある現象である。これにはどのような理由があるのであろうか。曾國藩の肩にかかる政治的責任が重くなり、またあの謙讓な人が「余古文の一道に於ける、十分の已に六ノ七を得たり。而して智を竭し力を畢す能わず。」（求闕齋日記類鈔）といいきれる自信を備えて以後、そして健康の衰えが目立ち心身の疲勞がきわめて激しくなつてから以後のことといつてよい。色々の理由が考えられようが、まず第一に消閑の書を讀むことも新たに彼の慰めになつてきたのではあるまいか。精神の緊張をほぐし、未知の間世界に遊ぶのは、まんざら悪いものでもなかつた。

積極的な理由としては、京官時代には唐鑑（鏡海）の影響下に程朱の學を専ら信奉していたが、軍務に就くにおよんで申韓にまで理解の幅がひろがり、また古文に對する態度にも最初の頃の單純な載道説から相當程度文の價值をも認めようとする傾向が中年に至つて顯著になつてきたことと相應する。ここに至つて曾氏には道學者の面影は薄くなり、思想に柔軟性が増し、抱擁力が大きくなる。

まず新たに慰めとなつた小説の類について。（また芝居も見ようようになるが、この事實も同様の傾向のあらわれでもある。しかし芝居の場合は交際の必要からも観ている。）即ち咸豐九年六月二十四日には、「日中眼蒙くなれるに因りて、一字を敬作せず、世説を閱し以て光日を消せり。」（假に世説もここに加えておく。）とか、咸豐十年十一月三十日の「梅堂と醫談最も久し。梅堂時事日に非なるに因りて、憤悶異常、紅樓夢を閲看し以て排遣に資せりと。余も亦之を閲すること下半日。」とか、同治七年閏四月二十一日の「曾阮等六家の詩と樂府詩集とを批校し、核對甚だ心神を費やす。小説儒林外史を閲して以て悶を散ぜり。」とか同治九年五月三十日の「紀公の筆記を閲す。……又紀公の筆記を閲す。……而して目下天津の洋務十分に棘手、焦灼に勝えず。故に僅かに筆記小説を閲すのみ。而して此の心實に未だ片刻も恬愉せざる也。傍夕紀澤と一談す、夜紀公の筆記を閲せり。」ことに二番目と最後の例とは、戦局や政治情勢がおもいうように動かないために、その鬱屈したおもいを慰める試みとして小説の類を手にとつてゐることが、つぶさに語られている。このおもいが昂じたのであろう。同治十年正月初一日には永年の元日の讀書初めの習慣を破り、「中飯後、閱微草堂筆記を閲すること良久しくして、眼蒙し。」のような場合すら生ずるに至るのである。

では、どんな種類の小説を讀んでいるだろうか。まず本格的な小説では、「紅樓夢」あたりからはじまり、「水滸傳」「儒林外史」というように長編の、それもリアリズム文學系統の代表作を一通り讀んでいるようだ。そして同治四年十二月初一日の「棋二局を圍み、水滸二卷を閲せり。」同じ月の初七日の「夜古文三首を温ね倦むこと甚し、水滸二卷を閲せり。」（外「水滸關係三例」というような單なる氣分轉換や慰みごとのこともあれば、或る時期には同治五年五月二十五日の「早飯後、文件を清理し、於に紅樓夢三卷を見る。……中飯後又小説十餘葉を閲せり。」外十一例の紅樓夢についての記事が續き、同じ年の八月二十日になつて「小説は眼を遮る已。」との反省を行なつているが、三カ月をへだてた十一月二十四日には「於に又小説十葉を閲せり。」と、またも小説に親しむにいたつた意志力の不

足を嘆く言葉があらわれている。

それからさらに一年半ばかりの後、同治七年閏四月二十一日（前出）からはじまる、儒林外史に熱中する時期がある。翌日の二十二日には、「早飯後文件を清理し、一紙を習字し、棋二局を圍み、小説書を見ること、三刻許り。……又小説を閲して倦むこと甚し。」またその翌日の二十三日の「小睡片刻、小説十餘葉を見る。……小睡片刻、又小説十餘葉を閲す。……夜小説數葉を閲せり。」外五例を數えることができるが、晩年に至つて紀昀（文達）の閱微草堂筆記を愛することと著しさを加えている。

即ち同治七年六月二十二日の「閱微草堂筆記」を観るにはじまる多くの例は、ただ單なる等間の書（同治十年三月二）に止まらないことを語っている。まず實例をあげて行けば、同じく同治七年六月二十七日の「紀文達の筆記を閲し倦むこと甚し。……又紀文達の筆記を閲せり。」外この前後の五例。同治九年五月二十二日の「紀公の筆記を閲す。」及び五月三十日の記事（前出）外この前後の五例。同年十二月十八日の「又閱微草堂筆記を閲す。」外この前後の六例。同治十年正月初一日（前出）及び三月二十六日の「余が目蒙殊に甚しく、閱微草堂筆記等間の書も亦見る能わず、因つて洋床の上に在りて閉目小坐す。傍夕少しく睡る。」と云うように眼病に苦しみながら讀續けている。この三カ月足らずの間に外に十二例。

同年四月十五日の「閱微草堂筆記を閲す。」十六日の「閱微草堂筆記を閲す。……夜又閱微草堂筆記を閲す。」十七日の「閱微草堂筆記を閲す。」は、けだし會國藩のこの筆記小説についての日記における最後の記述であり、また翌年の二月四日に世を去つた彼の最後の小説であつたらう。しかしこの年の五月初十日、澄沆の兩弟にあてて次の手紙をだしている。そしてこのなかには、閱微草堂筆記についての評語をも含んでいるのである。「閱微草堂筆記は紀文達公の著す所に係わり、多く狐鬼及び因果報應の事を言えり。長沙如し買う可き有らば、弟も亦常常之を閲す可し。」そして弟に讀むことを薦めているのである。さらに同年六月二十七日には、「長沙に閱微草堂筆記無くんば、當即ち此の間の一部を以て弟に寄すべし。紙板亦壞けれども、之を金陵市店の板に較れば、猶略勝れる耳。」と、わざわざ買つて送らうとさえしている。その熱心の程も知れようが、「多く狐鬼及び因果報應の事を言えり。」の句は、會文正文集の卷一にある紀氏嘉言序では、次のように詳細に論じられ、且評價を加えられている。紀氏嘉言序はまず人の性を賢愚に分ち、愚者を救う道を説

いて次第に儒佛の異同を及ぶ。もともと「愚者は罰を懼れて罪寡し、故に餘慶餘殃を稱え易き」ところなのに秦が力で天下を征服して以來、「聖哲と奸宄と、同じく氣數の中を流轉」するとう有様。それにつけてこんで佛者が輪廻因果の説をなしたために、「懼れて行を改むる十に四ノ五。」に至つた。しかし道は常ある者で、常者はすでに立つているのであるから、わが儒の言は敵われはしない。「而して浮屠の妄を爲す、後世の事變人心これを言うに從えるものなれば、則ち浮屠警世の功は、吾が儒と略く同じからん。」というように、佛敎に對しても抱擁力を示した後、いよいよ本論に入り、「河間の紀文達公、博覽彙識、百家の書、其の原を辨まえ、其の歸を竟さざるは靡し。著す所の閱微草堂筆記五種、考獻徵文、搜神志怪、衆態畢ごとく具わる。其の主旨は勸善懲惡に歸し、中國聖人流傳の至論を崇む。亦佛氏の説を廢さず、愚民の入り易き者を取る。委曲剖晰し以て其の聽を聳だたしめ、海以内、幾家に一編を置けり。」即ち世の文學史家は勸善懲惡の弊をその缺陷として説き、「考獻徵文、搜神志怪、衆態畢ごとく具わ」る典雅潤達な文章を愛するのだが、曾氏はその境地にかなり同情を示しながらも、搜神志怪も勸善懲惡、俗耳に入り易きものとして統一的に理解しようとする。またそうした態度はこの書序を求めた宛平の徐春泉の態度でもあつた。彼は「其の瀰精にして以て世を警するに足る者を選び、別録すること一帙、名ずけて紀氏喜言と曰う」のである。曾國藩はこの時期には、すでに純乎たる宋學者ではなく漢學に理解を持ち、また晚清の學者の先驅としてか、佛敎をいちがいに退けない。彼の思想と表裏一體をなしている古文の範圍から、次第に俗文學にまで理解の幅がひろげられて行くのも不思議なことではない。

五 結

古文の範圍から次第に俗文學にまで理解の幅がひろがつたというだけでは、まだ正確ではないだろう。あらたまつて筆を執る場合には勿論古文（この古文自體も變化しているのだが）を書くが、日常の用を便するにはかなり口語化した文章が使われている。これは當時の風潮ではあつたが、曾國藩は世に尺牘體と呼ばれるこの形の文章の名手でもあつた。家書、家訓および日記の一部はそれである。先

に引用した文にもそのため、漢文の書下し體としてはやや安定の悪い俗語が雜つてゐる。この種の文の特徴は、總體に平易でのびのびとしており、細述するによく、内容本位である。やたらに難かしい故事や熟語がでてくることなく、といつて俗に流れもせず、適度に抑制の効いた實用文である。そして彼はひそかなる自負を、この種の文章に抱いていた。「類纂選する所の書牘、盡くは吾が心を厭さざる者あり、未だ古文の書牘何者をか最善とするや知らず」とも「古文の中、惟書牘の一門のみ竟に佳なる者鮮なし。八家中韓公差や勝る。然れども亦書簡の正宗に非ず。此の外は則ち竟に采る可きなし。」(求闕齋日記類鈔)とも云つてゐる。書簡というような日常生活に關係の深い部分は、すでに清代には韓退之の書牘の形式は守れなくなつてはなかつたらうか。そして、徐々に獨自の發展を遂げていたのではなかつたらうか。小倉山房尺牘に洪錫豫という人が序を書いて云つてゐる。「隨園先生嘗て謂えらく、尺牘者古文の唾餘、今の人或は尺牘を以て古文の悞と爲す也。」(悞は誤。)しかし曾國藩は袁枚のように、「隨に作り、隨に棄る。」(同序)の態度とは、さすがに違つてゐた。彼は何一つするのにも、たとえ人が唾餘と呼ぶような小技に従うのにもやはり眞劍にならざるをえない。別にそれだからいいといつてゐるのではなく、そのために彼は幸であるか不幸であるかは知らない。道光二十二年九月十八日附の四人の弟にあてた長文の手紙(同日の「日記」に云う、信を寫して弟に與えること三千字)では、はやくもこの書簡の意味を重視し、「嗣後、我が諸弟に寫すの信は、總て此の格紙を用う。弟宜く存留し、毎年裝訂して冊を成すべし。其の中の好處は萬々忽略に看過す可らず。諸弟が信を寫して我に寄するも、亦須く一色の格紙を用い、以て裝訂に便ならしむべし。」と、云つてゐる程である。一貫した精進の態度が、よく伺われよう。

以上具體例を追つて曾國藩の俗文學における實作、讀書範圍を説き、さらにやや古文の側の狀況をもその思想的背景に觸れながら略述を試みたつもりであるが、結論的にいへば、古文家としてすでにかなり新しい事態に即應する體制を確立しつゝあつたこと。かなりの程度口語を採り入れた尺牘體の名手であつたこと。そこに折衷性と抱擁力が生れ、俗文學を必要に應じて認めるだけの弾力性が出来てきたこと。同時にまた太平天國戰爭による實地の偉大なる教育があり、曾國藩の文學は濃厚に過渡期の性格を示してゐるのであつて、ただ單なる桐城派古文の中興の祖という位置づけでは不十分であると考えられるものである。(この一文は、「日本中國學會」第九回全國大會の發表草稿に、手を加えたものである。)